

政は大丈夫だと、緊縮財政にならないと言いつけるか。

町長 緊縮財政の規模というのが明示はできないかもしれない。無理、無駄のところを縮減、廃止して産業振興には政策的に投入をしていく考え方が必要ではないか。緊縮財政の時代も、どの時期かで必要な時もあるかもしれない。現状ではまだ安心かと思う。

再質問 大丈夫だという力強い言葉をいただきました。今後経費をいくらか削減して、そのお金をどう使うというところを数字で見えるように示していくのが重要であると思う。その経費削減の中で、4月から電力自由化で北電から買わなくてもよくなる。土別市は一昨年の年度途中から、公共施設の電気を北電でないところから買っている。28年度、町の電気を北電から買うのか。

総務課長 電力自由化の関係は、色々な選択がある。現在まだ新規参入や撤退する事業者等もある。北電との関係

も考慮しなければならぬ。もう少し状況をみたくうえで検討していきたい。

再質問 企業版ふるさと納税に取り組んでいくとのことであるが、4月から9月まで調べてみると、上士幌町が5億9,000万円、規模的に共有するところがある山形県最上町では2億円。まず企業版のふるさと納税というよりは、ふるさと納税をしっかりと目標を定めて、そして、町には企業とのネットワークもある。今、自主財源を確保できる。今日からできることではないか。是非、目標を掲げていただき自主財源の確保をお願いしたい。ほかと違い日経新聞関係のネットワークで150社ぐらいの団体が入っている。10億円はハードルが高いが、5億円位は目標として掲げてやっていると数字ではないか。下川は不可能を可能にできた町です。是非実践をしていただきたい。

町長 上士幌町は、上士幌牛という目玉商品がある。下川のふるさと納税でお返しし

ている特産は、トップがアスパラ、二つ目がフルーツマト。これだけでは限界がある。今後は特産品の商品開発などもやっていきたい。企業版は、少し営業戦略を見極めながら、企業に働きかける必要がある。補正で大きい額を歳入できるような努力したいと思えます。

再質問 幸せ日本一は分かりづらいのではないかと。幸せは状況によって変わる。次から次と比較して続かない。一人一人の考え方や状況が違う。幸せは競争するものではない。日本一というのであれば下川の場合、目指すは世界一ではないか。

町長 幸せ日本一のまにしようというフレーズは、一つの精神的目標もある。その裏付けとして幸福度指数をしっかりと示していくことができたらい。今作業を進めている。住民の皆さんが幸せを感じる、そういうものをつくっていききたい。住民の利用料金、使用料金、負担金など下川ほどの位置にあるか上川管内の比較表をつくってみたい。

こういうところを目標にして、幸せ日本一の町をつくっていただくことができればいいと思えます。

再質問 上川管内の比較でなく日本一ということであれば、やっぱり比較は日本ではないか。仕組みを大きく変える行政改革、組織改革は、これから検討するのではなく、これだけの予算を進めるから、こういう体制を進めるといのが一体的セットでないか。新卒で入って、育てていくまでに5年、10年掛かっていく。地域の実情からすると、やはり即戦力、知識または経験を有した人が職員として必要ではないか。今、下川の状況からすると、職員の民間派遣も優先順位が高いのではないかと。

町長 今年はいよいよ切った職員9名の採用を考えている。現状、差し引きでいくと2名の職員が外に出ている。民間に出す余裕がない。必要性があればそういうことも視野に入れていきたい。

再質問 経済成長でも豊か

な暮らしが実感できない。所得が上がらない中で、格差がどんどん広がって、不平等になってくる。上川管内の市町村比較ではなく、お金が掛かるのは、子育てから小学生、中学生、特に高校生、専門学校、大学に行く多額のお金がかかる。何でも無料ということではないが、きめ細かくトータルで支援をする必要がある。いわゆる間接的な所得補償ともいえます。所得がなかなか上がらない中でも、負担する時に非常に住みやすい住んでよかった町になる。所得に比べてとか色々問題もあるが基本的な考え方は。大胆に負担がかかる時に支援、サポートをする。奨学金の制度創設も考えられる。ほかの町村と比較するのではなく、日本一を誇れる福祉の町、もちろん高齢の方への支援も含め提案します。

町長 これまでの執行者もそういうところに重きを置いて、政策的に反映してきたと思う。色々と研究し、少しでも反映できるように汗をかいていきたい。